

楽曲紹介

解説=永井玉藻

11/22 | 11/23

11/22

11/23

モーリス・ラヴェル(1875-1937)  
左手のためのピアノ協奏曲 二長調

モーリス・ラヴェル(1875-1937)のピアノ協奏曲、といえば、昨年の東京フィル7月定期での演奏をご記憶の方も多いただろう。その際の曲目解説で、ラヴェルはピアノ協奏曲の作曲と同時並行して、もう一つのピアノ協奏曲を作曲していたことを記したが、今年の11月定期では、その“双子のかたわれ”である「左手のための協奏曲」が演奏される。

タイトルに“左手のための”とあるのは、この作品をラヴェルに委嘱したウィーン生まれのピアニスト、パウル・ヴァイトゲンシュタイン(1887-1961)との関連による。彼は1913年に演奏家としてデビューしたが、その翌年に第一次世界大戦が勃発し、戦場で負った傷が原因で右手を切断することになってしまった。そこで彼はレパートリーを拡大するために、同時代の作曲家たちに自分のための作品を委嘱したのである。

作曲にあたり、ラヴェルは既存の左手のための作品を分析し、ソロ・パートの研究をしたという。また彼は、1931年に行われたインタビューでも「このような特質の作品においては、必然的に、両手用に書かれたパートよりテクスチュアが貧弱な印象を与えるようではいけない」と述べている。実際、“左手”のソロ・パートは、まるで両手で演奏しているかのような音域の広さと高度なテクニックが特徴的。今日では、多くのピアニストが挑戦する作品の一つである。

曲は単一楽章だが、テンポや曲想の違いに基づき、大きく3つの部分に分ける

ことができる。冒頭、コントラファゴットのソロが導くオーケストラが、緩やかな付点リズムのパターンを繰り返しながら、徐々に音域と音量を上げつつ頂点に達すると、ソロ・ピアノが華やかに登場する。2つ目の部分では、歯切れ良い行進曲風のリズムに乗り、ピアノのリズミックな旋律と、フルートとピッコロによる楽しげな民謡風の旋律が交替する。最初の部分で聞かれた付点リズムのパターンが戻ってくると、ピアノの長いカデンツァを挟んで、最後は盛大に締めくくられる。

【作曲年代】1929～1930年 【初演】1931年11月27日にパウル・ヴィトゲンシュタイン邸で私的に行われたピアノ2台による演奏を経たのち、1932年1月5日にウィーンでロベルト・ヘーガー指揮、ヴィトゲンシュタインのピアノで初演

【楽器編成】ピッコロ(3番フルートに持ち替え)、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、ウッドブロック)、ハーブ、弦楽5部、独奏ピアノ

グスタフ・マーラー(1860-1911)

## 交響曲第1番 二長調『巨人』

1875年、ラヴェルがフランス南西部のバスク地方で産声をあげたその年に、ヨーロッパの東側では、ボヘミア地方出身の15歳のグスタフ・マーラー(1860-1911)がウィーン音楽院に入学した。彼は当初ピアノ科の学生だったが、卒業後は指揮者としてプロの第一歩を踏み出し、1884年ごろからは気鋭の若手として急激に評価を高めていく。その20代後半のマーラーが作曲したのが、交響曲第1番である。

作品は1889年に、5楽章構成の「2部からなる交響詩」として初演されたが、繰り返し改訂が行われたため、様々な稿が存在している。1906～1907年の最終稿に至るまでに生じた変更の中でも特に大きなものを挙げると、①ももとの第2楽章(「花の章」)がカットされて4楽章構成の「交響曲」になったこと、②1893年と翌94年の演奏時には「巨人」のタイトルや各楽章の副題がついていたこと、そして③1896年の演奏から、管打楽器の編成が拡大したこと、の3点だろう。どの稿を使用するか、指揮者によって違いが出る点も聴きどころである。

第1楽章：長い序奏～主題提示～展開部～再現部で構成される。弦楽器の倍音奏法（ハーモニクス）の中、木管楽器が「ラ→ミ」「ファ→ド」の下行する4度音型をこだまのように繰り返す。この4度は直後に「レ→ラ」になり、さらにこの「レ→ラ」の4度が、チェロによって奏される主要主題の軸となっている。

第2楽章：初演時には第3楽章だったスケルツォ。この楽章の頭でも、低弦による「ラ→ミ」の4度が聞かれ、へ長調に転調したレントラー風の間奏部も、「ラ→ミ」の4度で開始される。

第3楽章：フランスの民謡「フレール・ジャック」の旋律で始まる葬送行進曲。ヴァイオリンとハーブが奏する柔らかな中間部ののち、ティンパニによって4度音型が繰り返され、第4楽章へそのまま続く。

第4楽章：1893年と1894年の演奏時には、「地獄から天国へ」という副題がついていた楽章。シンバルの一撃と金管楽器のファンファーレ、ヴァイオリンの緩やかに上下する旋律が対照的である。最後には、ホルンが全員起立して演奏するようマーラーが指示している箇所があり、高揚感に満ちたフィナーレとなる。

【作曲年代】1884～1888年 【初演】1889年11月20日 プタベストでマーラー自身の指揮による

【楽器編成】フルート4（3番、4番はピッコロ持ち替え）、オーボエ4（3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え）、クラリネット4（3番はバス・クラリネット、4番は小クラリネット持ち替え）、ファゴット3（3番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム）、ハーブ、弦楽5部

ながい・たまも／パリ第4大学博士課程修了、博士（音楽学）。専門は西洋音楽史、特に19世紀から現代までのフランス音楽やオペラ、バレエ作品。現在、東京フィルハーモニー交響楽団ライブラリアン、武蔵野音楽大学・大学院非常勤講師。主な論文に「19世紀後半のパリ・オペラ座におけるバレエ伴奏者」（日本音楽学会、2018年）、共著書に『《悪魔のロベール》とパリ・オペラ座 19世紀グランド・オペラ研究』（上智大学出版、2019年）ほか。